

講義ユニット名	薬理学		所属科目名	生体反応学
講義ユニット 責任者	さかい のりお 酒井 規雄	所属	神経薬理学 (内線 5140)	
		メール	nsakai@hiroshima-u.ac.jp	
講義ユニット コーディネーター	さかい のりお 酒井 規雄	所属	神経薬理学 (内線 5140)	
		メール	nsakai@hiroshima-u.ac.jp	
授業方法	講義形式(講義中心)であり、プリントを配布予定。また、実験を中心とした実習、演習を行う。			
概要	薬理学は薬物がどのように生体に影響を及ぼすかを学ぶ学問である。従って、薬物とそれに反応する生体の両者を理解する必要がある。薬理学の講義は、総論と各論に分かれている。総論では薬物の作用機序に関わる生体反応系を学ぶ。各論では様々な疾患の治療薬について、それらがどのような作用機序で治療効果を発揮するのかを学ぶ。総論と各論は縦系と横系の関係にあり、その両者が相まって、薬理学の全体が理解できるようになる。また、生体試料を用いた実習を行い、薬物が生体にどのような反応を引き起こすかを実感してもらう。			
講義ユニットの 到達目標	<p>薬物・毒物の濃度反応曲線を描き、その決定因子を説明できる。</p> <p>薬物の受容体結合と薬理作用との定量的関連性及び活性薬・拮抗薬と分子標的薬を説明できる。</p> <p>薬物・毒物の用量反応曲線を描き、有効量・中毒量・致死量の関係を説明できる。</p> <p>薬物・毒物の吸収、分布、代謝と排泄を説明できる。</p> <p>薬物の生体膜通過に影響する因子を説明できる。</p> <p>薬物投与方法(経口、舌下、皮膚、粘膜、直腸、注射、吸入、点眼、点鼻等)を列挙し、それぞれの薬物動態を説明できる。</p> <p>薬物の評価におけるプラセボ効果の意義を説明できる。</p> <p>薬剤の有効性や安全性とゲノムの多様性との関係を概説できる。</p> <p>薬物(オピオイドを含む)の蓄積、耐性、タキフィラキシー、依存、習慣性や嗜癖を説明できる。</p> <p>各臓器系統(中枢・末梢神経、循環器、呼吸器、消化器、腎泌尿器、血液、内分泌等)に作用する薬の薬理作用、適応、有害事象、投与時の注意事項を説明できる。</p> <p>抗微生物薬の薬理作用、適応、有害事象、投与時の注意事項を説明できる。</p> <p>抗腫瘍薬の適応、有害事象、投与時の注意事項を説明できる。</p> <p>麻薬性鎮痛薬・鎮静薬の適応、有害事象、投与時の注意事項を説明できる。</p> <p>主な薬物の有害事象を概説できる。</p> <p>薬物動態的相互作用について例を挙げて説明できる。</p> <p>分子標的薬の薬理作用と有害事象を説明できる。</p>			
講義日程	別紙日程表を参照のこと			
出席の取り扱い	<p>実習については、求められている出席を単位の修得要件とする。</p> <p>講義については、全講義回数数の3分の2以上の出席を中間試験、期末試験の本試験の受験要件とする。</p>			
評価項目	<p>到達目標の達成度(基本的理解と知識の応用)</p> <p>少なくとも「コアカリキュラム程度の理解」「4年生のGBTをパスするレベル」を満たすことを評価の可否レベルとしている。</p> <p>また、独自に「薬理学の学習目標と理解すべき薬物」を提示する。</p>			
評価法	<p>MCQ形式と記述形式の併用で試験を行う(配点:MCQ 70点、記述 30点)。</p> <p>本試験における合格基準は55点とする。</p>			
推奨参考書	<p>NEW薬理学 改訂第5版 南江堂 田中千賀子・加藤隆一編</p> <p>カッツング・薬理学 原著8班 丸善 柳澤輝行 他 監訳</p>			